

多賀城市文化財調査報告書第85集

# 市川橋遺跡

—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書IV—

縄文・弥生・古墳時代・中世以降の考察編1

平成18年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第85集

市川橋遺跡

—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書IV—

平成18年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第85集

# 市川橋遺跡

—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書IV—

縄文・弥生・古墳時代・中世以降の考察編1

平成18年3月

多賀城市教育委員会



# 例 言

1. 本書は、平成10～14年度にかけて実施した城南土地区画整理事業に係る市川橋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書には、縄文・弥生・古墳時代、中世以降の遺構・遺物についての考察を掲載した。
3. 本書の執筆は、Iを相澤清利、IIを千葉孝弥が担当した。
4. 本報告に際し、太田昭夫氏（仙台市立山田中学校）、丹羽 茂氏（東北歴史博物館）、古川一明氏（宮城県多賀城跡調査研究所）、村田晃一氏（宮城県教育庁文化財保護課）、渡邊泰伸氏（仙台育英学園高等学校）からご教示を賜った。
5. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

# 目 次

I. 縄文・弥生・古墳時代の考察 .....	1
1. 縄文・弥生時代の遺物 .....	1
2. 古墳時代の遺構と遺物 .....	3
II. 中世以降の考察 .....	14
1. 中世以降の遺物 .....	14



# I. 縄文・弥生・古墳時代の考察

## 1. 縄文・弥生時代の遺物

今回の調査では縄文・弥生時代の遺構およびプライマリーな遺物包含層は確認されておらず、主に古代の河川堆積土から縄文時代中期から弥生時代中期にかけての土器片が出土している。一部の資料を除いては、いずれの資料も転磨を受けて摩滅が著しく、また、すべて小破片であるため器形・文様構成の判別には困難を強いられた。このことを踏まえながら以下個々に説明を行う。

1は深鉢の口縁部に取り付く立体的な中空突起で、空洞の楕円と渦巻文で構成される。

2は深鉢の口縁部で小波状を呈する。外面は縄文帯（充填縄文LR）と横位平行沈線区画内磨消による文様帯が重層する。

3は深鉢の口縁部から体部にかけてのもので、直線的に外傾し口縁は平坦である。文様帯は上下に2条の平行沈線によって区画され、その間を弧線文・垂線文・斜格子文（半裁工具を使用）によって構成されている。

4は鉢形の体部と思われ、上部に入組状文、下部に縄文（LR）が施文される。

5は内湾する体部破片で、平行沈線内に斜めの刻目文がみられる。

6はB型突起が取り付く鉢の口縁部破片である。口唇部に1条の沈線を巡らし、体部には浮線状に匹字文が描かれる。

7は低い山形突起が付く鉢の口縁部破片で、外面に2条、内面に1条の横位平行沈線文がみられる。

8は口縁部が外反する鉢である。内面に段を有し、外面には浮線状の横位平行沈線文が4条みられる。

9は台付浅鉢の口縁部から体部にかけての破片で、非常に薄手の作りである。内面に1条、外面に3条の横位平行沈線文が巡らされ、真中の沈線に粘土粒2個を貼付し工字状にしている。内外面とも入念な横位ミガキがなされた精製土器である。

10は大型壺の肩部の破片で、3条の横位平行沈線が巡らされる。

11は深鉢もしくは甕の体部破片で、やや内湾しながら外傾し口縁部に至る。地文は斜走する縄文（LR）である。

12は高杯の脚部である。脚裾部に2条の横位平行沈線文、その上部には変形工字文が2段に渡って施文されている。変形工字文の交点部分には彫去を施し、その左右両端に粘土を盛り上げている。

13は高杯もしくは壺の肩部と推定される破片である。1条の沈線で波状かと思われる文様と2条の横位平行沈線で構成される。

14は鉢と推測され、縄文（LR）・1条沈線の下に磨消帯がある。

15はかるく括れる頸部を持つ浅鉢と思われ、3条の横位平行沈線文がみられる。

16は小型壺の口縁部から肩部にかけてのもので、外面の口縁上端付近に1条の横位沈線が巡らされる。

17は高杯の杯部で、小波状口縁を呈する。内面には2条の横位平行沈線文と波状口縁頂部に垂線が施される。口唇部には縄文が施文され、外面は磨消縄文手法により文様が構成される。文様は2条1対の沈線を基本とし、上下の横位沈線間に連続山形文がみられ2段まで確認される。

18～19は高杯もしくは鉢の体部破片であろう。17と同様に2条1対の沈線で文様が描出される。

20は口縁上端付近に2条の横位平行沈線文がみられる。

21は蓋の破片で、横位平行沈線文が3条確認されることから口縁部に近いところと推定される。

22は無頸壺の肩部破片である。流水状の変形工字文が2段にわたってみられ、交点部には垂線が加えられている。

23は口縁部が外反する鉢である。体部外面には磨消縄文手法による王字文が配される。内面には炭化物の付着が顕著に認められる。

24～25はやや大型の鉢の口縁部破片である。24の内面には口縁上端に縄文、その下に横位2条の平行沈線文が、外面には充填縄文手法による王字文が配される。25は磨消縄文手法によって縄文帯と磨消帯が上下交互に配置される。

26～28は所謂如意形の甕である。26～27には、口縁部下端に木目列点文、体部に縄文が施される。28には、口縁部下端に円形刺突文、体部に植物茎回転文が施文される。

29は底部片で、底面には織布痕がみられる。

30～33は地文のみのものを一括した。深鉢もしくは甕の破片と考えられる。30は羽状縄文、31は縦走縄文（0段多条）である。

次に、今回出土した縄文・弥生時代の土器について、主に年代的な位置付けを考察する。

1は縄文時代中期の大木8b式である。2～5は縄文時代後期中葉から後葉の宝ヶ峰～金剛寺式に比定される。6～10は縄文時代晩期の大洞A～A'式に比定され、9の台付鉢は大洞A<sub>2</sub>式段階に盛行するようである（註1）。11の甕もしくは深鉢は、縄文時代晩期大洞A'式～弥生時代前期後葉青木畑式にかけて見られる形態である。12は脚部の大きさや変形工字文の特徴から青木畑式に比定しておきたい。13は文様構成や沈線の太さから、弥生時代中期前葉頃かと思われる。14～16は特徴が曖昧であるため、弥生時代中期のものとするにとどめておきたい。17～25は弥生時代中期中葉榊形罎式の特徴を有する。ただし、22については中期前葉の名取市原遺跡出土土器に類似例があり、同段階までさかのぼる可能性もある（註2）。26～28は遠賀川系土器の系譜を引く、いわゆる如意形甕である。宮城県内では弥生時代前期後葉に出現し、中期まで存続する。28に特徴的な地文（植物茎回転文）は、弥生時代中期前葉の寺下罎式から採用され、榊形罎式に盛行する。29は織物圧痕がみられることから弥生時代のものであろう。30～33は縄文の施文される体部破片を一括してまとめた。30の羽状縄文（縄文LR・RL）が施文される深鉢は、縄文時代晩期大洞C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>式期に多出する。33の地文は直前段多条L4Rもしくは附加条第1種LR+R・Rであることから榊形罎式に比定される。その他については時期の特定はできない。

なお、弥生時代中期の土器には、遺存状況が非常に良好なものが何点か存在する（23～25・28）。これらの出自については、西側に接する山王遺跡でこの時期の遺物包含層が発見されており、この地区との関連性を考えておきたい。

（註1）須藤 隆 「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』第89号 1997

（註2）大友 透・福山宗志 「原遺跡―県道名取村田線改良工事関係発掘調査報告書―」名取市文化財調査報告書第38集 1997

## 2. 古墳時代の遺構と遺物

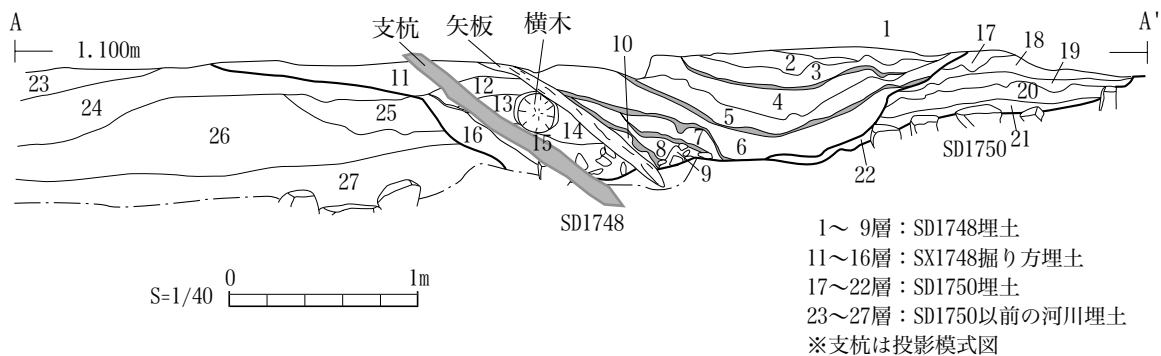
### (1) 遺 構

今回の調査で確実に古墳時代の遺構（河川も含む）ととらえられたものには、A42区のS X1667A河川跡、D91区北半部下層調査区検出の溝跡・河川跡、同じく南半部の性格不明の落ち込み（S X1744・1755）がある。可能性のあるものとしては、D27区S X2369河川跡があげられる。

これまでの市川橋遺跡における河川跡の調査では、古代、特に奈良時代の河川跡と重複あるいはその下層に古墳時代のものが発見される事例が増えてきている。このことは、古墳時代と奈良時代の河川はそれほど変わらない流路を形成していたことを示すものであろう（第7図）。

D91区では、この河川本流から分岐して丘陵の裾を巡るようにして各時代（古墳時代～古代）にわたって小川あるいは溝が形成されていった様子を確認した。このなかで護岸施設を伴うSD1748溝跡は、丘陵裾を沿うように構築されており、その時期は出土遺物、層位からみて古墳時代前期の所産である。本遺構の検出面からの深さは60cmであるが、西側に接する同時期のSD1751河川跡の西壁が古代の河川検出面とほぼ同じレベルまで立ち上がることから、構築当初の深さは約1.5m前後はあったものと推定できる。護岸施設の構築方法は、矢板を設置するためにあらかじめ掘り方を造り、支杭と横木を埋め込む念入りなものであった。この横木を挟み込んで施設を構築する方法は、弥生・古墳時代に発見されている堰等にみられる技術形態と共通するものである。多賀城市内においても同様な工法を取った構築物（堰あるいは堤防護岸施設）が山王遺跡東町浦地区において発見されている（註1）。これらの施設の構築は、先進地域からの土木技術の移入があつてこそ可能であり（註2）、加えて労働力の確保と集約も前提となっていたであろう。そこには、七北田川流域一帯を統括していた有力者層が介在していたと想定しておきたい。

次に、本遺構の構築目的や性格を検討するために同時期の周辺で発見されている遺構について概観してみる。まず、本地区の西側300mの地点（山王遺跡多賀前地区）の調査では、水田跡、水路等が南北約250mわたって検出されている。さらにここから北西約500mの地点（山王遺跡八幡地区）でも水田跡が発見されている。これらのことから、この地域一帯には広範囲に水田経営がなされていたとみてよいであろう。このような大規模な水田を維持するにあたっては、当然水利の管理は必要なものであり、本遺構については、この点を重視して灌漑用水施設としての性格を考えておきたい。



第1図 SD1748等断面・模式図



## (2) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、前期から中期にかけてのものであり、主に河川跡から出土している。土器については、前期と中期に分け器種毎に説明をする。

### 古墳時代前期

#### 土師器

【器台】54は受け部から脚部へ抜ける貫通孔まで残存する。受け部下半は稜をもち、口縁は外側につまみ出される。40は高杯になる可能性もある。脚部上半の破片で円窓が3ヶ所に付く。

【鉢】57は「小型丸底鉢」である。口縁部は内湾しながら開き、底部は小平底状に窪めている。

【壺】42は「直口壺」の口縁部破片である。内外面ともヨコナデ後、縦方向のヘラミガキ調整が施される。43・44は複合口縁のもので、43が内外面ともミガキ調整であるのに対して、44はナデ調整である。58は頸部に貼付突帯を巡らし、突帯上とさらにその上部に2段にわたって木目刺突文が施される。調整は頸部ヨコナデ後にハケメである。

【甕】45は球形の体部に「く」の字状に外反する口縁部を持つ。口縁部外面はヨコナデ、体部はハケメ調整である。38は小型の甕である。口縁は直立気味に立ち上がる。調整は口縁部ヨコナデ後、体部にハケメである。

### 古墳時代中期

#### 土師器

【杯】口縁が内湾するもの(35)、やや内湾しながら立ち上がるもの(34)、内湾しながら立ち上がり内面に稜を持つもの(47)、体部と口縁部の境に段を持ち、口縁部が直線的に立ち上がり端部で外反するもの(46)などがある。

【高杯】51・55は中空の脚部片で、中央部がやや膨らみ円錐形に近い形である。51が外面ミガキ調整であるのに対して55はナデ調整と異なる。

【鉢】48は底部が丸底気味で、体部が強い胴張りとなる。口縁部は直線的に立ち上がる。

【壺】52は口縁部径と体部径がほぼ等しいもので、底部は丸底である。53は算盤玉状の体部をもち、底部は平底である。36・56は口縁部径が体部径より小さく、口縁部の高さが体部の高さに比較して低いものである。36の底部は平底風丸底である。

【甕】37は口縁部が「く」の字状で、体部は球形に近いものと思われる。

【甑】39は単孔平底で、砲弾形を呈する。

#### 須恵器

【高杯】49は脚部片で、透しは方形の3方透孔である。外面はカキ目調整である。

【器台】50は脚部片で、右端は三角形の透し部分である。外面には櫛描波状文が4条確認される。工具は7本のもものと5本のもものが交互に使い分けられている。

#### 石製品

【石製模造品】59は滑石製で隅丸長方形を呈する。

【石器】2129は黒曜石製の円形搔器である。握拳大の角礫を素材とし、灰色の縞が特徴的である。背面に自然面を残し、刃部は急角度で縁辺には細かなツブレが認められる。

以上、今回出土した古墳時代の遺物について特徴を概述してきた。

前期の土師器については、出土量が少量であることや大半が破片であるため全体像を把握できない。よって、ここでは塩釜式の細分編年との対比は行わず、4世紀代のものとするにとどめておく。

中期の土器については、D91区 S X1744・1755出土の遺物が一括性の高いものであるため、若干の検討を行う。46は須恵器杯蓋を模倣したものと考えられる。体部が深めに作られているのが特徴である。47は内面に稜を持つことから南小泉式期の各段階にみられる一般的な杯である。48は県内では希少な器形であるが、仙台市南小泉遺跡第17次調査 S I-12から出土した土師器に類似例がある。報文では小型短頸壺と分類し、須恵器の器形と共通しているとされている(註3)。本例についても口縁部が直立ぎみに立ち上がることで、体部が強い胴張りになることから須恵器短頸壺の模倣と考えておきたい。49は有蓋か無蓋かは不明であるが、脚裾部に明確な稜を持たず幅広になることから、陶邑編年のTK23~47型式に比定される(註4)。土師器の年代は共伴した須恵器の時間幅におさまるものとみられることから、5世紀後葉から末頃としておく。

黒曜石製石器(円形搔器)については、続縄文系の遺物であり、肉眼観察ではあるが加美町湯の倉産と推定される。隣接する山王遺跡では比較的多く出土しているが、いずれも5世紀前半の時期に伴った例が多く、本事例の追加でさらに時間幅を持って存続することが明らかになった(註5)。

この他、河川跡出土のものがまとまっているが、壺において形態差のあるものがみられ(52と56など)、これは南小泉式期における新古の時間差を示すものと考えられている。

(註1) 相澤清利 「山王遺跡—第8次発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第22集 1990

(註2) 広瀬和雄は、山王遺跡の事例を引いて、技術者の移動による土木技術の伝播がはやくから行われており、それは長年のネットワークに乗って技術者が移動したと考えたほうが理解しやすいとしている(広瀬 1991)。

(註3) 佐藤 洋 「南小泉遺跡—第16~18次発掘調査報告書—」仙台市文化財調査報告書第140集 1990

(註4) 須恵器の編年観については、渡邊泰伸、丹羽 茂、古川一明、村田晃一の諸氏にご教示いただいた。

(註5) 平成12年から14年にかけて宮城県教育委員会が実施した市川橋遺跡の調査(吉野 2003)では、7世紀代の竪穴住居跡や土壙から黒曜石製の石核や剥片が出土しており、当該地域では、確実に7世紀代までこの種の石器が伴うようである。市川橋遺跡に隣接する山王遺跡でも、6世紀後半~7世紀前半に東北地方北部の系統に属する土師器が見られるとする指摘もあり(村田 2002)、これとの関係を考慮すべきであろう。

#### 【引用・参考文献】

吉野 武 『市川橋跡』宮城県文化財調査報告書第193集 2003

村田晃一 「7世紀集落研究の視点(1)」『宮城考古学』第4号 2002

広瀬和雄 「7 土木技術・生産と流通II」『古墳時代の研究』第5巻 1991

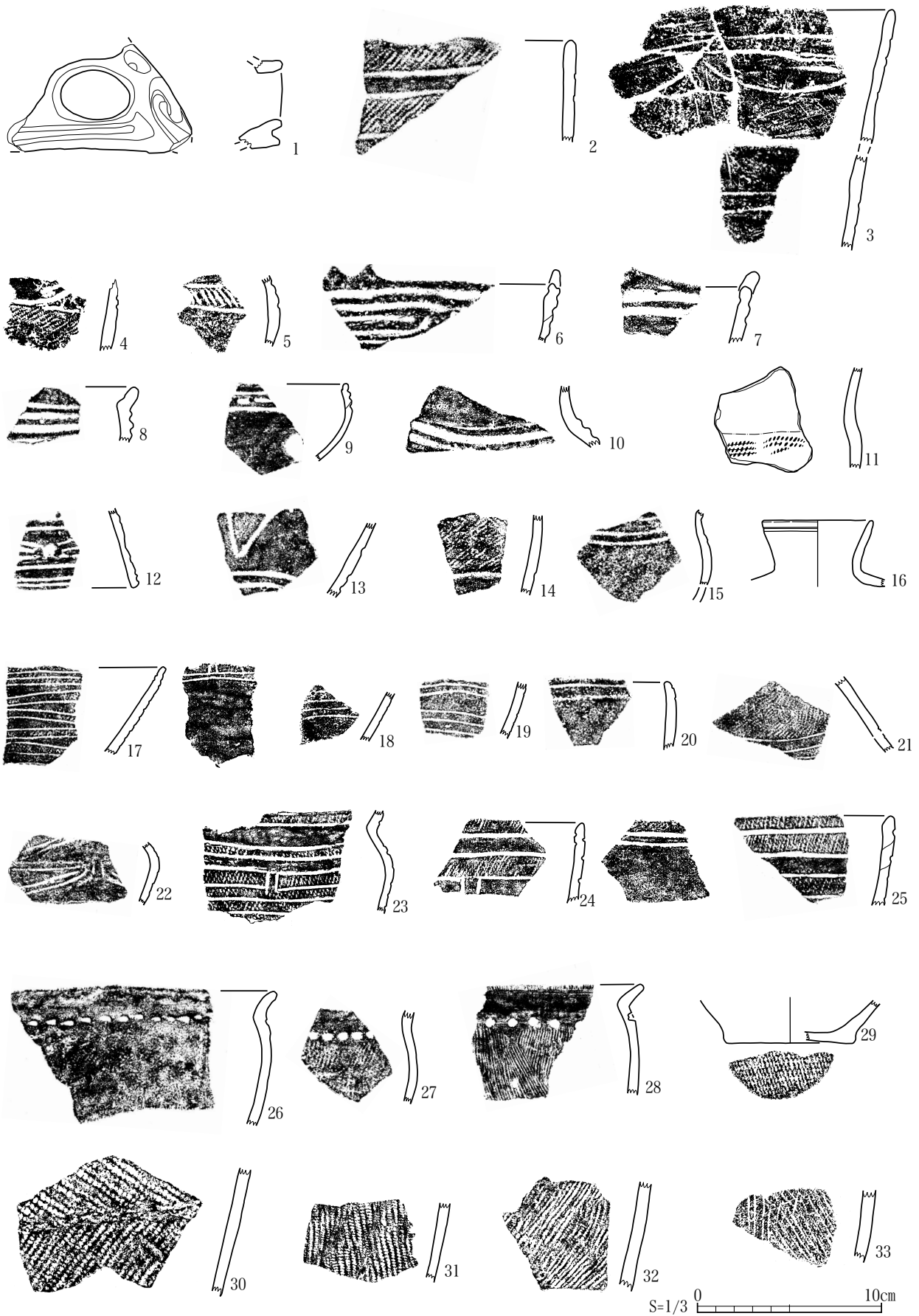
宮城県教育委員会 「山王遺跡II」宮城県文化財調査報告書第167集 1995

多賀城市教育委員会 「山王遺跡I—仙塩道路建設に係る発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第45集 1997

多賀城市教育委員会 「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書I—」多賀城市文化財調査報告書第60集 2001

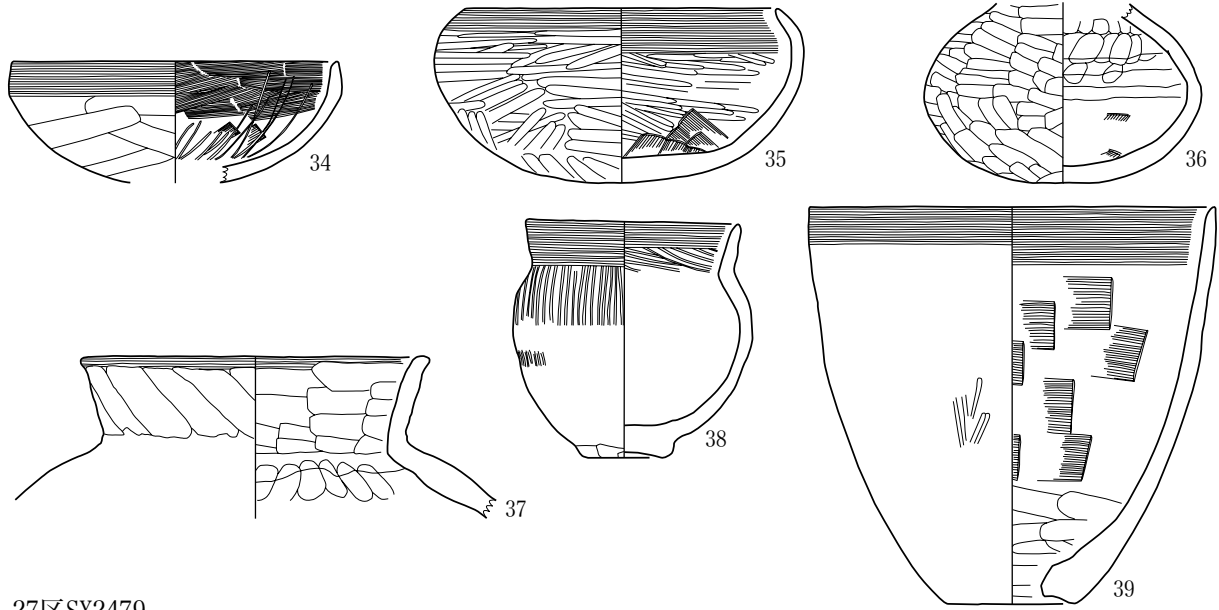
多賀城市教育委員会 「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II—」多賀城市文化財調査報告書第70集 2003

多賀城市教育委員会 「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III—」多賀城市文化財調査報告書第75集 2004

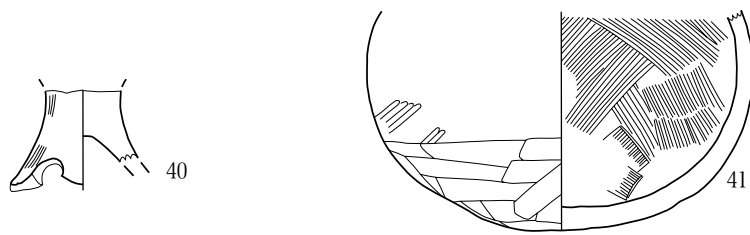


第2図 出土遺物実測図（縄文・弥生時代）

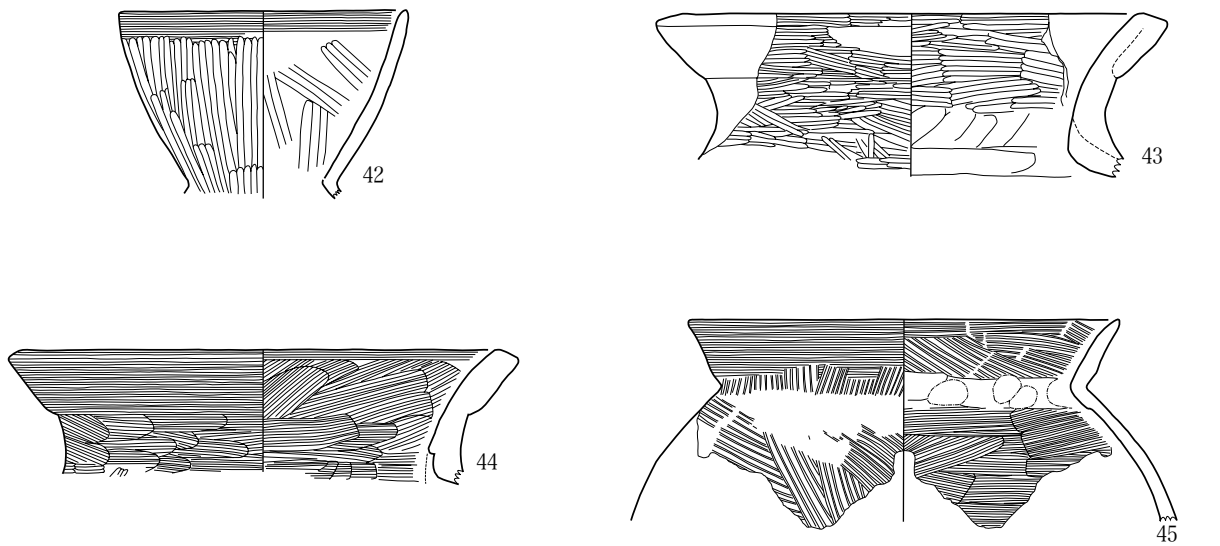
42区SX1667A



27区SX2479



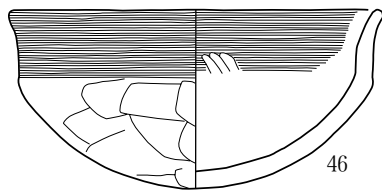
91区SD1748



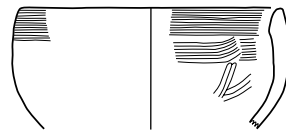
S=1/3 0 10cm

第3図 出土遺物実測図 (古墳時代1)

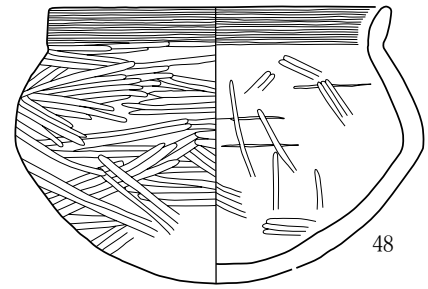
91区SX1744・1745



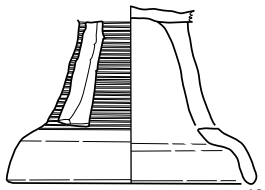
46



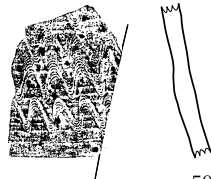
47



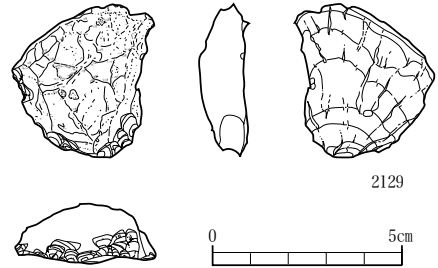
48



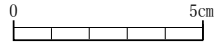
49



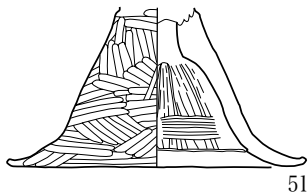
50



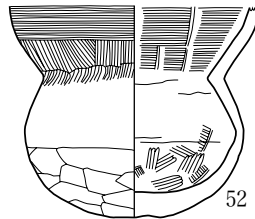
2129



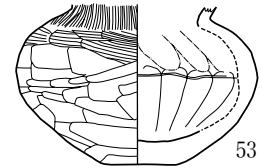
27区SX2364・2365



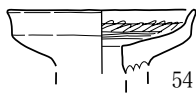
51



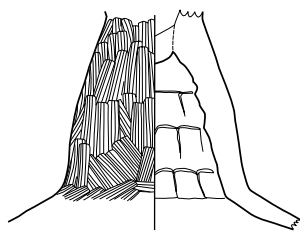
52



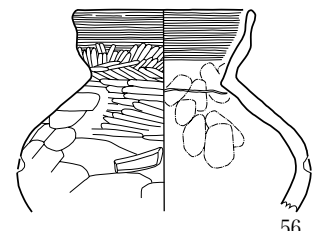
53



54

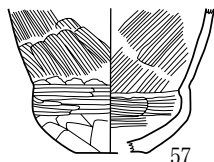


55



56

100区



57



58

66区



59



第4図 出土遺物実測図(古墳時代2)

縄文・弥生時代の土器

番号	種類	器種	遺構番号	層位	特徴	登録番号
1	縄文土器	深鉢	SX2368		突起部分、楕円の貫通孔、渦巻文	D1259
2	縄文土器	深鉢	SX2365	4	小波状口縁、磨消縄文	D1215
3	縄文土器	深鉢	SX1748		弧線文、平行工具による格子目文	D122
4	縄文土器	深鉢	SX1748		入組文	D7789
5	縄文土器	不明	SX2365	4	刻目文	D1261
6	縄文土器	鉢	SX2364		浮線状四字文	D1260
7	縄文土器	鉢	SX2365		山形突起	D7788
8	縄文土器	鉢	SX2364		浮線状平行沈線文	D1264
9	縄文土器	台付浅鉢	SX2510		粘土粒貼り付け、工字文	D1225
10	縄文土器	壺	SX2479		大型壺	D1262
11	縄文土器	甕	SX2479			D1232
12	弥生土器	高杯	SX2479		変形工字文	D1227
13	弥生土器	高杯or壺	SX2364		波状文?	D1214
14	弥生土器	鉢?	SX2479		磨消帯	D1216
15	弥生土器	小型鉢	SX1812	7		A7950
16	弥生土器	壺	SD2151		小型壺	A1909
17	弥生土器	高杯or鉢	SX1812	4c	小波状口縁、磨消縄文、連続山形文	A4286
18	弥生土器	高杯	SX2478	3	2条1対の沈線	D1224
19	弥生土器	高杯or浅鉢	SX2364		2条1対の沈線	D1220
20	弥生土器	鉢	SX2364		2条1対の沈線	D1222
21	弥生土器	蓋	SX1812	4c		A4285
22	弥生土器	壺	SX2366	1	無頸壺、流水状変形工字文	D1226
23	弥生土器	鉢	SX1812	1	磨消縄文、王字文	A2071
24	弥生土器	鉢	SX2365	4	充填縄文、王字文	D1218
25	弥生土器	鉢	SX2333		磨消縄文	A4502
26	弥生土器	甕	SX2364	4	木目列点文	D1217
27	弥生土器	甕	SX2364	4	木目列点文	D1223
28	弥生土器	甕	SX1853A		円形刺突文	A5377
29	弥生土器	不明	SX2479		織布痕	D1221
30	弥生土器	深鉢	SX2479		羽状縄文	D1263
31	縄文or弥生土器		SX2365		縦走縄文	D1266
32	弥生土器	甕	SX2365			D1265
33	弥生土器	甕	SX2364			D1219

古墳時代の土器 石製品

単位cm

番号	種類	器種	遺構番号	層位	調整	口径	底径	器高	備考	登録番号
34	土師器	杯	SX1667A	1	【外面】ヨコナデ、ケズリ 【内面】ナデ、ミガキ	(13.1)	—	—	中期	2068
35	土師器	杯	SX1667A	1	【内外面】ヨコナデ、ミガキ	12.5	—	6.0	中期	2069
36	土師器	壺	SX1667A	1	【外面】ミガキ	—	—	—	中期	2067
37	土師器	甕	SX1667A	1	【内外面】口縁：ヨコナデ	(14.0)	—	—	中期	2070
38	土師器	小型甕	SX1667A	1	【外面】口縁：ヨコナデ 体部：ハケメ	8.6	3.95	9.45	中期	2066
39	土師器	甕	SX1667A	1	【外面】口縁：ヨコナデ	(16.3)	5.2	15.9	中期	2065
40	土師器	高杯	SX2479		【外面】ミガキ	—	—	—	前期	1270
41	土師器	壺	SD1748		【外面】ケズリ、ミガキ 【内面】ナデ	—	—	—	中期	1278
42	土師器	壺	SD1748	底面	【内外面】口縁：ヨコナデ 体部：ミガキ	(13.6)	—	—	前期	2440
43	土師器	壺	SD1748	検出面	【外面】ミガキ 【内面】ナデ、ミガキ	(20.4)	—	—	前期	9989
44	土師器	壺	SD1748	検出面	【内外面】ナデ	(20.4)	—	—	前期	114
45	土師器	甕	SD1748	底面	【外面】口縁：ヨコナデ 体部：ハケメ 【内面】ナデ、ハケメ	(17.3)	—	—	前期	111
46	土師器	杯	SX1744	黒色粘土層	【外面】ヨコナデ、ケズリ 【内面】ナデ、ミガキ	(15.0)	—	8.2	中期	115
47	土師器	杯	SX1745	黒色粘土層下位	【外面】口縁：ヨコナデ 【内面】ナデ、ミガキ	(10.6)	—	—	中期	116
48	土師器	鉢	SX1745	黒色粘土層	【内外面】口縁：ヨコナデ 体部：ミガキ	13.65	—	11.1	中期	117
49	須恵器	高杯	SX1745	黒色粘土層下位	【外面】カキ目	—	10.0	—	脚部 中期	118
50	須恵器	器台	SX1745	黒色粘土層下位		—	—	—	脚部 中期	119
51	土師器	高杯	SX2364	4	【外面】ミガキ 【内面】シボリ目	—	(12.0)	—	中期	1276
52	土師器	壺	SX2364	4	【外面】ナデ、ケズリ 【内面】ナデ、ミガキ	—	—	—	中期	1274
53	土師器	壺	SX2364	4	【外面】ナデ、ケズリ 【内面】ユビナデ	—	3.7	—	中期	1273
54	土師器	器台	SX2365	4	【内面】ミガキ	(7.6)	—	—	中期	1271
55	土師器	高杯	SX2365	4	【外面】ナデ 【内面】シボリ目	—	—	—	中期	1275
56	土師器	壺	SX2365	4	【外面】口縁：ヨコナデ 体部：ケズリ、ミガキ 【内面】ナデ	(7.4)	—	—	中期	1272
57	土師器	鉢	SX2363	2	【外面】ナデ、ケズリ、ミガキ 【内面】ナデ	—	(2.9)	—	前期	1269
58	土師器	壺		104区第1層	【外面】ヨコナデ、ハケメ	—	—	—	前期	8351
59	石製模造品		SD2342b		最大長：2.95 最大幅：2.7 最大厚：0.45cm	—	—	—	中期	5548
2129	石器	円形搔器	SX1745	黒色粘土層下位	長さ：4.0 幅：3.7 厚さ：1.2cm 重さ：20g	—	—	—	中期	湯の倉産 155

出土遺物観察表

E351

E354

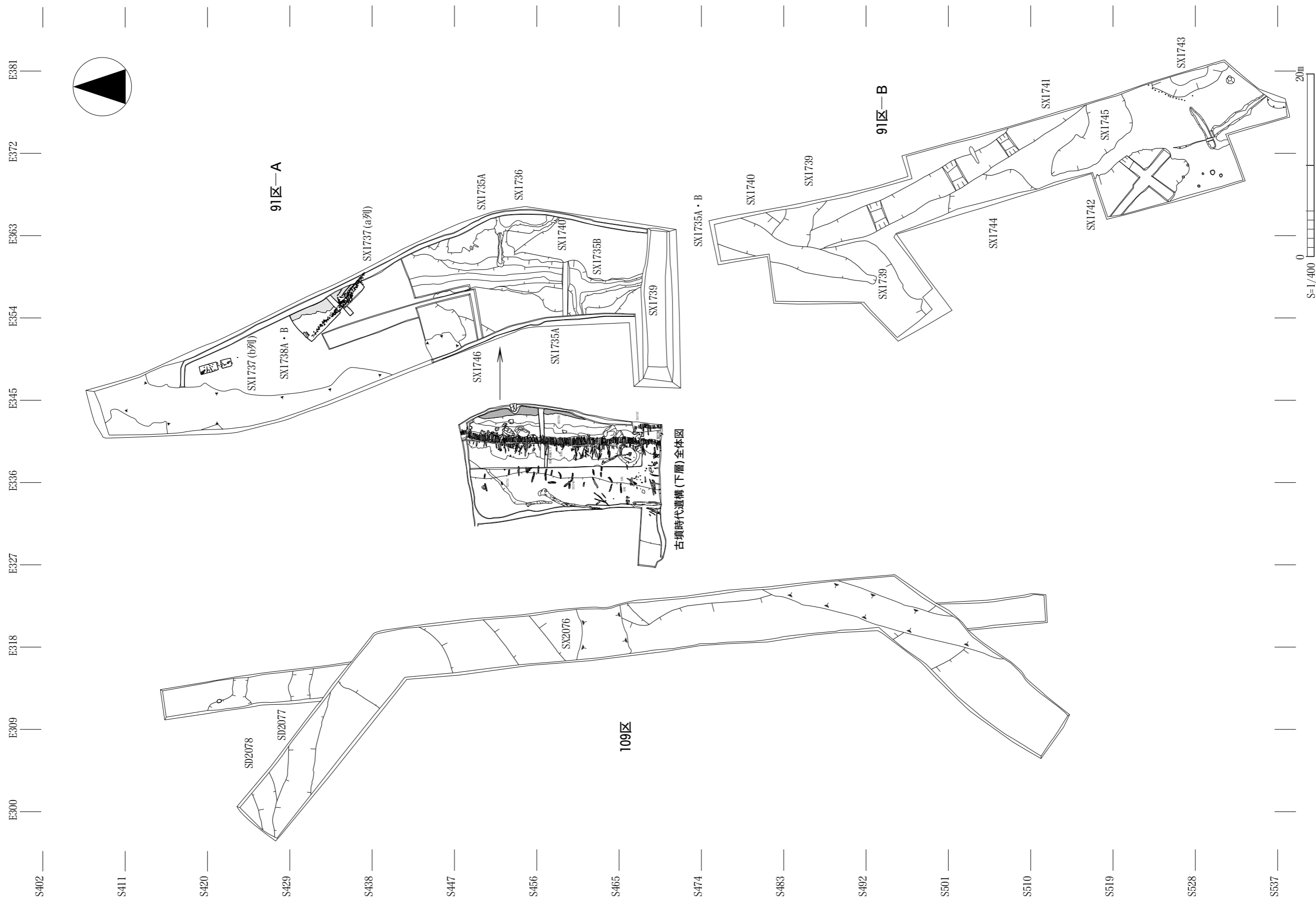
E357

E360

E363

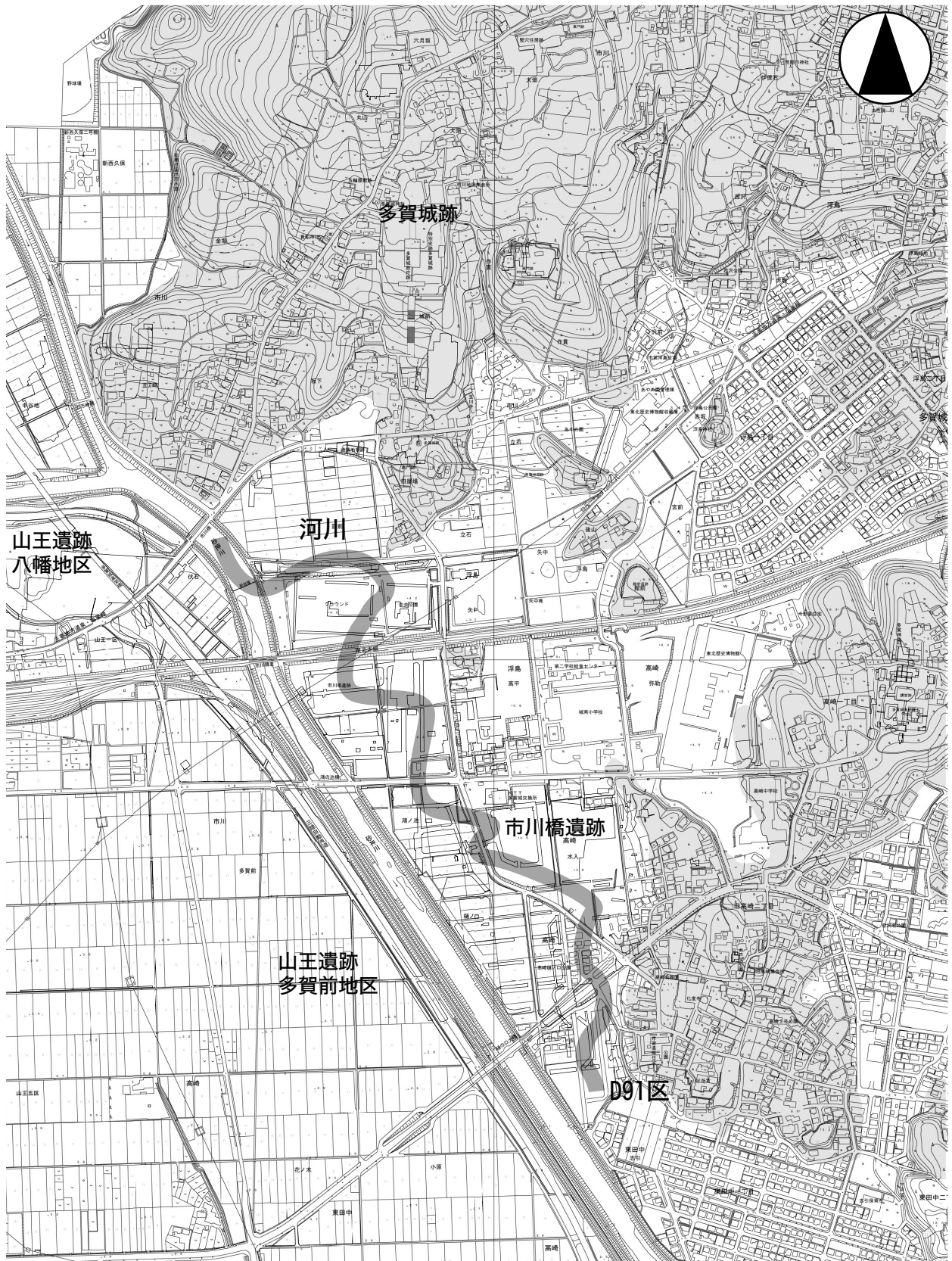


第5図 D91区(下層)古墳時代遺構全体図



第6図 D区 南東部遺構全体図





0 1000m  
S=1/10000

第7図 奈良時代の河川跡流路想定図

## II. 中世以降の考察

### 1. 中世以降の遺物

中世以降の遺物としては青磁碗2点、施釉陶器丸皿1点、無釉陶器甕1点、挽物漆器碗3点、立体人形2点などが出土している。以下、個別に説明を加える。

#### (1) 出土遺物の概要

1は青磁碗の口縁部破片である。内外両面にごく薄い緑色の青磁釉が施されている。やや直立気味に立ち上がり、口縁部は外反している。口縁部のやや下には軽い段が形成されている。

2は青磁碗の底部破片である。高台の内側から底部外面にかけては無釉であるが、それ以外にはごく薄い緑色の青磁釉が施されている。体部下端から高台にかけては回転ヘラケズリによって削り出されており、高台は内外から端部にかけてそぎ落とすように削り込まれており、そのため高台端部は平坦な面を成すが、幅は一定していない。内面底部から体部へ移行する部分には細い圏線、その内側には花文が陰刻されている。

3は施釉陶器皿の底部破片である。内面底部には陽刻の印判による菊花文が押印されており、大窯期の丸皿と称される小型の皿である。底部は回転ヘラケズリの後、断面が三角形の低い高台を貼付している。全面に灰釉が施され、外面底部中央には輪トチンの一部が融着している。

4は無釉陶器甕あるいは壺の体部破片である。小破片のため、特徴的な部分は残存していない。色調についてみると、外面は灰赤色を呈して光沢があり、内面はにぶい褐色である。断面は芯が褐灰色、表面に近い部分にはにぶい褐色を呈している。胎土には白色粒や小石が含まれている。

7・8・9は挽物の漆器碗である。形態的に類似しており、破片接合時に生じた誤差を考慮すれば、法量的にも近似した個体の可能性がある。これらは、底部が円盤高台状を呈し、さらにその外縁に低い輪高台を削り出したものである。体部の下半部は強く屈曲し、下半部から口縁部にかけては直立気味に立ち上がっている。底部外面を除く全面に黒色漆が確認できる。底部外面にロクロ爪痕を残しており、7・9には「×」の刻書がある。

5・6は木製の立体人形である。5は立烏帽子をかぶった人物を象ったもので、目・鼻・口は削り出して表現され、立烏帽子の部分は墨で黒く塗られている。首から下は棒状に加工され、長さは4.8cm、断面形はおおよそ円形である。6は坊主頭の人物を象ったものである。後頭部はやや腐食しているが、顔面はおおよそ残存しており、目・鼻・口が墨で表現されている。首から下は幅3mmの板状に加工されているが、大部分が欠損している。

ところで、『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II一』の観察表において、5の名称を「オシラサマ」とした。しかし、本資料は頭部から下の棒状を呈する部分はわずか4.8cmしかなく、一般的なオシラサマと比較すると極端に短い。オシラサマをアソバセル場合、頭部より下の棒状を呈する部分を手に持つことから、それに相応しい長さが必要となる。他の長いものに差し込むことで必要な長さを確保するものもあったらしいが、本資料をそのような型式とすることは現状では困難である。オシラサマとの類似点は認められるが、年代や性格など様々な要素を包括する意味で立体人形としておきたい。6についても、オシラサマとの類似点は認められるが、頭部から下の形状が問題となる。ほとんどが欠損して

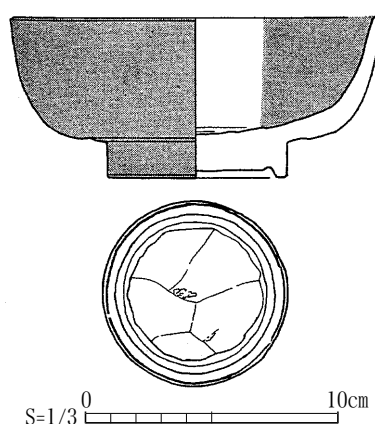
いるとはいえ、残存部で見える限り細々強い印象は否めず、5と同様にオシラサマとは確定することは控えておきたい（註）。

## （2）出土遺物の年代

2の青磁椀は高台の形状から中国明代の製品と見られる。上田秀夫は14世紀から16世紀の青磁椀の分類を行い、編年試案として14世紀から15世紀にかかる頃に位置づけているが、この時期の青磁椀の編年については相当な時間幅を持たせて考える必要があるとしている（上田：1982）。1については不明である。

3の施釉陶器皿は瀬戸窯あるいは美濃窯の大窯期の製品である。藤澤良祐氏の編年によれば第2段階の製品に類似しており、1520～1555年の年代が与えられている（藤澤：1993）。

9の挽物椀は古代の道路遺構が廃絶した10世紀中葉以降の自然堆積層から、7・8は中世の無釉陶器甕と同一の遺構から出土している。7～9と同様の特徴を備えた挽物椀については、編年的位置づけが明確にされていないが、柳之御所跡（岩手県平泉町）から出土している資料はそれらの年代を考える上で手掛かりとなる。同遺跡は平泉藤原氏に関連するもので、12世紀第3四半期頃を中心とする遺跡である。出土している挽物椀についてみると、体部下半部の屈曲は弱いが、高台の特徴は7～9と共通しており、このタイプの高台が古代末期に出現したことを示唆している。その中で、1点ではあるが体部・高台の特徴が7～9と一致



第8図 柳之御所遺跡出土挽物漆器椀（参考）

する資料があり、年輪年代測定で1186年とされた折敷と相伴している（岩手県教育委員会：2001）。この資料は、文治合戦によって藤原氏が滅亡した時期のものと考えられており、7～9と同じタイプの挽物椀が12世紀第4四半期に存在したことを示している（第8図）。以上のことから、7～9の年代についても12世紀第4四半期頃の年代を考えておきたい。

5は10世紀中葉以降の河川から出土したものであるが、下限を示す資料が全くないことから中世・近世のいずれに属するものか不明である。

## （3）遺構・遺物の分布からみた中世以降の様子

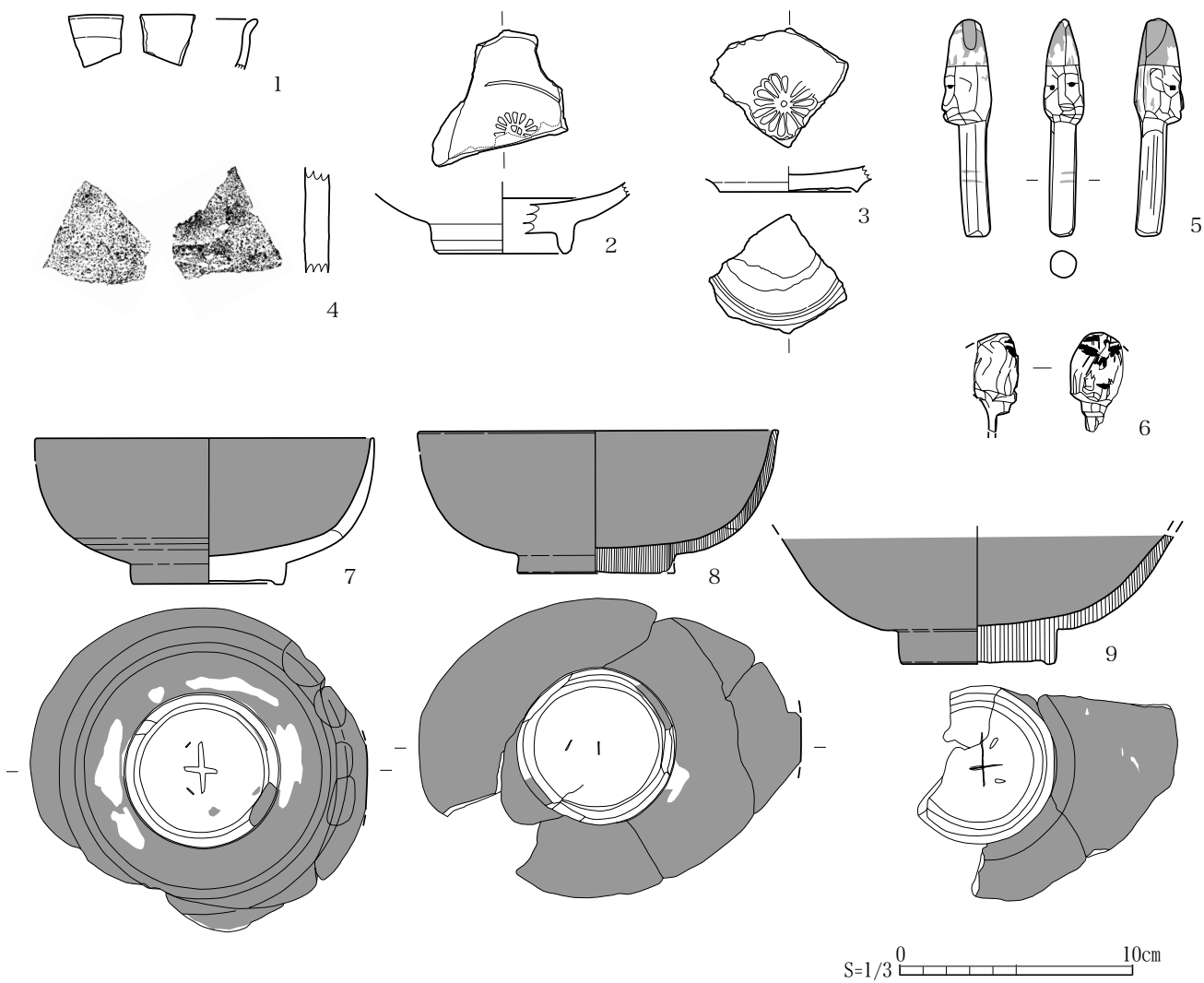
これまで述べてきたように、城南地区における中世以降の遺構・遺物はきわめて少ない。このことは、居住域としてはほとんど利用されなかったことを示すものであろう。耕作域として使用された可能性については否定できないが、水田跡等の遺構は確認していない。河川については、8世紀後葉以降おおよそ同様の流路であったと見られるが、南北大路の東側では次第に東側に位置が移動していることが明らかになっている。

以上のように、この時期の様相については情報量が少なく、実態については不明と言わざるを得ない。

(註) これらの資料を検討するにあたり、多賀城市文化財保護委員の三崎一夫氏よりご教示を得た。

**【参考文献】**

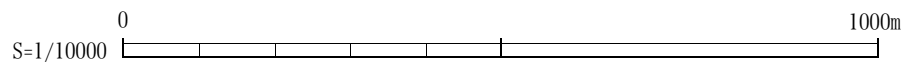
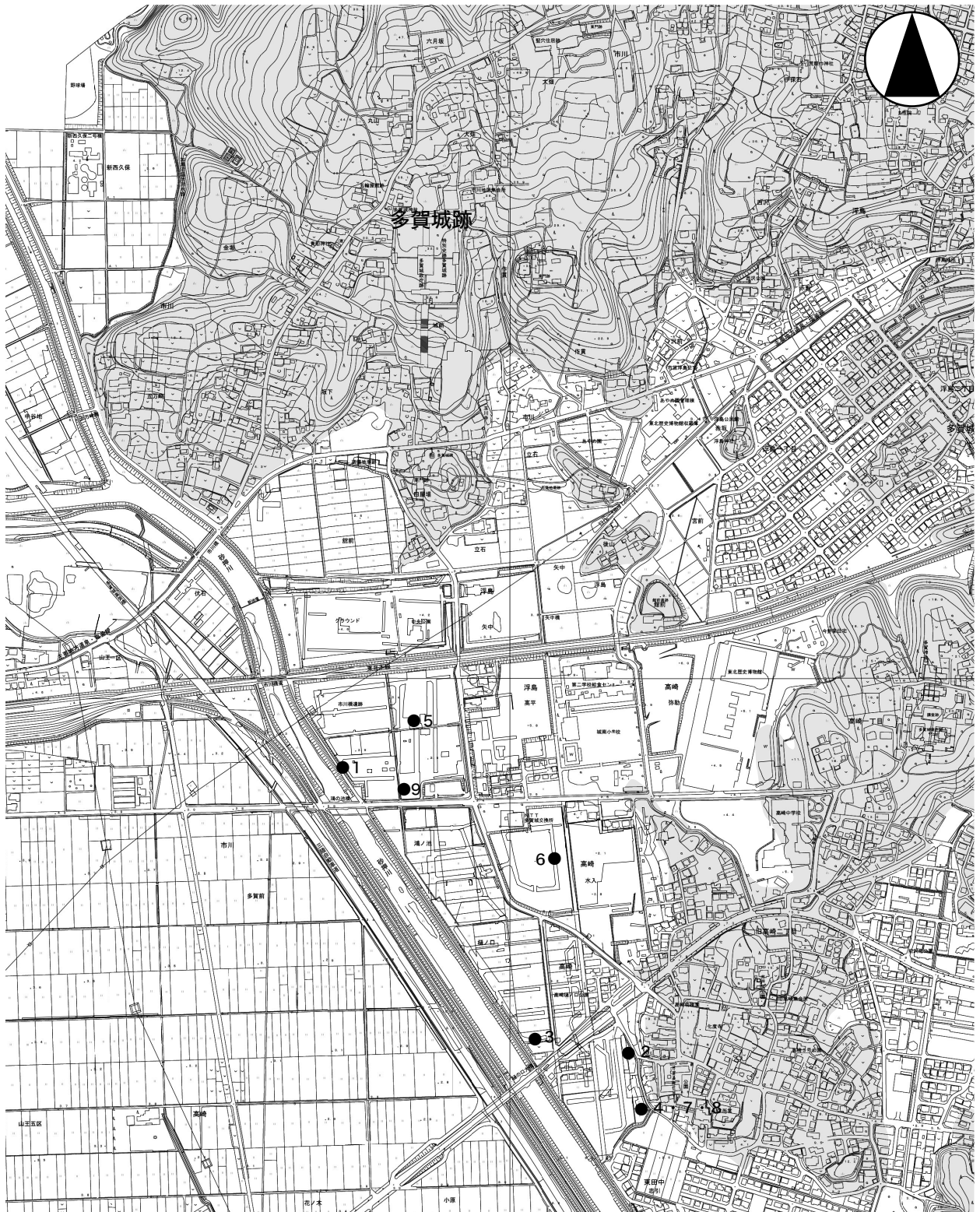
- 藤澤良祐 「瀬戸大窯の変遷」『瀬戸市史 陶磁史篇四』愛知県瀬戸市 1993  
上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会 1982  
岩手県教育委員会 『柳之御所遺跡—第52次発掘調査概報—』岩手県文化財調査報告書第111集 2001  
岩崎敏夫 「東北のオシラ信仰」『東北民間信仰の研究 上巻』 1982



単位cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	青磁・碗	D8区 1層			—	—	—	1	R679	
2	青磁・碗	D91-A区 表探	回転ヘラケズリ、底部：無軸		—	(5.9) 9/24	—	2	R127	
3	施釉陶器・丸皿	D33区 1層			—	(6.0) 8/24	—	3	R10040	
4	無釉陶器・甕	D91-B区 S X1743	ヘラナデ	ヨコナデ	—	—	—	4	R128	
番号	種類	遺構・層位	口径 残存率	底径 残存率	器高	樹種	木取り	写真 図版	登録 番号	備考
5	立体人形	A44区 旧砂押川				アスナロ		5	R114	第75集 第206図1681
6	立体人形	C41区 1層				不明		6	R169	
7	挽物漆器・碗	D91-B区 S X1743	(14.8) 1/24	6.7 24/24	6.3	ケヤキ			R278	第75集 第240図1980
8	挽物漆器・碗	D91-B区 S X1743	(15.6) 1/24	6.8 19/24	6.2	ケヤキ	柾目		R277	第75集 第240図1981
9	挽物漆器・碗	A66区 IV層	—	6.6 16/24	—	ケヤキ	柾目		R157	第75集 第212図1731

第9図 中世以降の出土遺物



第10図 中世以降の出土遺物分布図



- 1 (左上) 青磁碗
- 2 (左下) 青磁碗
- 3 (右上) 施釉陶器丸皿
- 4 (右下) 無釉陶器甕



5 人体人形 S=1/1



6 人体人形 S=1/1

※番号は第9図と同じ

# 報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき						
書名	市川橋遺跡						
副書名	城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅳ 縄文・弥生・古墳時代・中世以降の考察編 1						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第85集						
編著者名	千葉孝弥 相澤清利						
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134						
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
市川橋遺跡	宮城県多賀城市市川、高崎、浮島	042009	18008	38度 17分 40秒	140度 17分 30秒	19981102～1221 19990412～20000208 20000410～20020331 20010403～1221 20020408～0530	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
市川橋遺跡	集落 古代都市	古墳・奈良・ 平安時代、 中世	水路、河川跡	土師器、須恵器、 黒曜石製石器、石 製模造品、中世陶 器、漆器		古墳時代前期の灌 漑用水路を発見し た。	

多賀城市文化財調査報告書第85集

## 市川橋遺跡

—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅳ—

平成18年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市中央二丁目27番1号  
電話 (022) 368-0134  
発行 多賀城市教育委員会  
多賀城市中央二丁目1番1号  
電話 (022) 368-1141  
印刷 今野印刷株式会社  
仙台市若林区六丁の目西町2-10  
電話 (022) 288-6123